
心を射抜いた水鉄砲

ざらめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心を射抜いた水鉄砲

【Nコード】

N3567Q

【作者名】

ざらめ

【あらすじ】

私の名前は明石愛子！榊原中に通う15才！今、高校受験の真っ只中なんだ！ちなみに視力はイニシャルと同じA・A

「翔！話したい事ってなんなのよ！放課後に呼び出したりして！」
私は、明石愛子！榊原中に通う15才！高校受験の真っ只中なんだ！ちなみに視力は、イニシャルと同じA・A
今、幼馴染の香取翔に呼び出されて、体育館の裏にいる。

「あ、あのさあ、単刀直入に言うぞ！」
「う、うん。で、何なのよ！」

翔は一呼吸おいて言った。

「俺、愛子が好きなんだ！」

「え、えー?!」

私は正直言っただけ嬉しかった。翔とはずっと一緒にいてお互いの事をよくわかってたし。

でも、そう言うのは恥ずかしかったから、言っただけだった。

「告るんなら、もっと言葉を選びなさいよ！そんな平凡な……」

「だいたい、この場所だってそう！良い返事をもらいたいなら……」

「私の心を射抜きたいなら、もっと工夫しなさいよね！」

私は家へ帰るために走り出した。

「つかさー、田崎とかマジウザいよねー。」

「まあ、ネガティブだね。」

「でしょでしょ!?!」

今は塾の帰り。田崎は塾の講師なんだけど、超ネガティブで、マジウザい。話相手は親友の中野美樹。おっとりしていて、性格は正反対だけど、なぜか気が合う。

「そう言えば今日さあ、翔に告られたんだよね〜。」

「え、ほんと？返事はもちろん……。」

「応えなかった！」

私は美樹の声を遮って言った。

「えー！だつて愛子つて翔の事・・・。」

「平凡だったの！」

私はまた美樹の声を遮つて言った。

「時間は放課後、場所は体育館の裏、言葉は『俺、愛子の事が好きなんだ』だよ！絵に描いたような平凡さでしょ？」

「た、確かに・・・。」

「あ、もう着いちゃった。じゃあね！」

私は私の家のマンションの前に来て、ふと足を止めた。誰かの視線を感じたのだ。私の視力A・Aの目で辺りを見渡すと、植え込みの陰で、何かが動いたのが見えた。その瞬間。

「バン！」

銃声のような音が聞こえ、胸に何かが押し当てられたような気がした。胸元を見ると、何かで濡れていて、服の襟の辺りに何かがあった。

「痛みは感じないけど、撃たれたのかなあ」

襟の辺りにあった物は、簡単に取れた。それはカードだった。

読んでみて、私はハツとした。そこには、「小さい時からずっと一緒に、お前は気が付かなかったかもしれないけど、俺はずっとお前が好きだった。」と書いてあったのだ。

「あ〜いこー！」

声の主は、思った通り、翔だった。

「翔・・・私を撃つたのつて、翔なの？」

「うん。」

翔はにっこり笑つて応えた。

「これでな。」

翔が持っていたのは水鉄砲だった。

「え？」

改めて胸元を見ると、それは確かに血ではなく、ただの水だった。

「それつて・・・翔！」

翔は私の言葉を気にせず、真剣な目で言った。

「お前の心、射抜けたか？」

「もう・・・。」

私は翔に体を寄せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3567q/>

心を射抜いた水鉄砲

2011年1月28日10時44分発行